

入選

助け合いの温かさに触れて

鹿児島県 大口明光学園中学校

二年 小水流 来美

私は中学1年生のときに、豪雨災害を体験しました。そのときに、悲しみや辛さを経験しましたが、それ以上にたくさんの「親切」と「感謝」に出会いました。

私の住む地域では、川の堤防が決壊し、地域全体が濁流に飲み込まれました。農業用ハウスなどが流され、道路や水道管が寸断し、災害が起こる前と全く違った景色を見るのは、とても辛かったです。身動きのとれない中、一番最初に来てくれたのが、消防士・消防団の方々でした。

取り残された高齢者を3人がかりで助け出し、私たちにも大きな声で励ましの言葉をかけてくれました。「大丈夫ですか」「もう安心してくださいね」という言葉は、そのときの私たちにとって、とても温かい言葉でした。

また、救助のあとには、水の入った袋を一軒ずつ、手渡しで配ってくれました。なにもできない私は、「ありがとうございます」しか言えませんでした。がんばっている方々を見ると、「私も手伝わない」と思いましたが、怖くなって足を進めることができませんでした。

その日の夕方、親戚のおばちゃんが、寸断されている道路の境界線まで、みんなのお弁当を持ってきてくれました。私は母といっしょに、近所の方々に配りに行くことになりました。私は、外の景色を見るのが苦しくて、立ち止まっていました。そのとき、

「辛い気持ちは、よくわかるよ。でも、それはみんないっしょだよ。お母さんだって辛いよ。だからこそみんなで協力して、助け合っていくことが大事なんじゃない？ほら、行くよ。がんばれ！」

と母は言って、私の頭をポンッと軽く叩きました。

「辛いのは、私だけじゃないんだ。」

私は母の言葉に、みんなが同じ気持ちで助け合うからこそ、勇気が出るのだなあと思いました。私もその一人として、笑顔でお弁当を配ることができました。「いっしょに、がんばっていきましょうね。」と声をかけると、笑顔で「ありがとうね。」と返ってくるのがとても嬉しかったです。

私たちは今、復興に向かって一歩ずつ進んでいます。たくさんの方々に、助けられて今があるのだと思います。元の形に戻るのには時間がかかるけれど、私たちができる小さなことに取り組んで、助け合いで作られた地域の復興を目指し、前を向いていこうと思います。

私が考える「親切」とは、大きな題名のようなものだと思います。「親切」の中には、助け合い、協力、優しさなど、さまざまな意味があります。小さな「親切」でも、大きな「親切」でも、生きていくためには、とても大事だと思います。

その中の人でも多くの「親切」を知る人こそ、人を「辛さ」から「幸せ」に変えてくれるのではないかなと思いました。